
日本人中医診療記

その 11

天津中医薬大学 柴山周乃



6月も半ばとなりましたが、中国は欧米と同じく、9月に新年度が始まりますので、6月中旬から7月上旬は受験、そして卒業式シーズンです。大学のキャンパスのあちらこちらで、学士のガウンを着て記念撮影をしている学生たちの姿を見かけます。わが校の本科生は人数が多く、学士服が足りませんので、卒業式前に撮影用に貸し出しをし、卒業式は私服で参列します。

私は、大学院を卒業した年の2010年9月から、3年生から5年生まで3学年の中国人学生の講義を担当していますが、当時3年生だった学生たちが今年、本科卒業です。3年間一緒に過ごしてきましたが、医学生として、そして人間として大きく成長し、感無量で



す。JAL 時代、新人 CA 教育の教官をしていましたので、教壇に立つのは初めてではありませんでしたが、異国の地で教壇に立つというのはやはり特別で、文化の違いなどからたいへんなことも多々ありました。教えると同時に、彼らからもいろいろなことを教わったような気がします。7 年制・特進クラスの彼らは、3 年間の修士課程を 2 年で履修しなくてはならず、この先も試練が続くと思いますが、引き続きサポートしていきたいと思えます。

JAL を退職して、まもなく 17 年経ちますが、苦楽をともにしてきた仲間は、かけがえのない存在で、いまだにお付き合いがあり、帰国するたび、上司・同期・後輩たちと会い、楽しいひと時を過ごしています。今年の冬休みに帰国した際、ある後輩が「子宮腺筋症」を患い、かなりつらい思いをしていることを知り、本人に連絡を試みました。彼女の症状を聞けば聞くほど心が痛み、中医治療も視野に入れているとのことでしたので、こちらへ持ち帰り研究することにしました。

天津中医薬大学・第二附属病院前院長の韓水教授は、全国名老中医に選出されており、世界中医薬学会連合会・婦人科専門委員会会長職にも就いています。1990 年から、国家中医薬管理局と天津市科学技術委員会の資金援助を受け、「子宮内膜症・神経-内分泌-免疫システムに対する活血化瘀・軟堅散結法の整体調節作用」という研究を始め、2002 年に完成させ、「婦痛寧顆粒」という中成薬を開発しました。韓教授は、院長退任後も引き続き診療を行っていますので、教授を訪ね、アドバイスしてもらいました。



韓水教授

今回は「子宮腺筋症」の中医治療についてお話しします。後輩は、天津中医薬大学・第二附属病院製剤「婦痛寧顆粒」を飲み始めて 3 カ月、かなり症状が改善されました。本人の了承を得ましたので、ケースレポートも合わせてご紹介します。

子宮腺筋症の中医治療*¹

中医学古書に、「子宮腺筋症」という病名の記載はありません。類似する症状・病因病機・弁証論治の叙述は、「痛経」「月経過多」

「癥瘕」「不孕(ふよう＝不妊)」などの病証のなかで散見されます。

一 病因病機

血瘀は、子宮腺筋症の病理の基礎である。多くは、外邪入侵・情志内傷・素体因素あるいは手術損傷などの原因で、臟腑機能の失調、衝任の損傷、気血不和をもたらし、経血が正常に流れず、「離経」の血が瘀積、下腹に留結し、衝任・胞宮・胞脈・胞絡が阻塞し発症する。瘀血が停滞すれば、不通則痛(通じざれば則ち痛む)、痛经(月経痛)がみられる。瘀積が長引けば、癥瘕を形成する。瘀血が消失しなければ、新血が帰経せず、脈外に血液が溢出し、月経過多・経期延長となる。重症の場合、出血は持続する。本病のキーポイントは「瘀」であり、瘀血をもたらす原因である。

二 弁証論治

本病の臨床表現には、痛经・月経過多・経期延長・不孕などの特徴があり、主要な病機は瘀血阻滯である。ゆえに、活血化瘀法を用いて治療する。瘀血は有形の邪であるが、長引けばその多くは虚となり、臨床上、虚実錯雜が多見される。疼痛の発生時間・性質・部位、月経の状況や硬結の大きさ・部位、さらに体質や舌脈にもとづき、寒熱虚実を弁別する。治療は、月経周期の各段階に応じて行う。一般的に、月経前は調気祛瘀を、月経期は活血祛瘀・理気止痛を、月経後は益氣補腎・活血化瘀を主に治療する。弁病と弁証を併用し、痛经が主のものには祛瘀止痛に重点を置き、月経失調あるいは不孕のものには調経・助孕も合わせ、癥瘕のあるものには、散結消癥法を用いる。弁証ののち、①氣滯血瘀証、②寒凝血瘀証、③熱灼血瘀証、④氣虚血瘀証、⑤腎虚血瘀証に分けて治療する。

三 臨床思考

近年、子宮腺筋症の中医薬治療は、非常に高い成果を得ており、治療は内治法・外治法・針灸などを総合的に用いて行う。

1. 常用方剂：桂枝茯苓丸・抵当湯・補陽還五湯・少腹逐瘀湯・血府逐瘀湯・膈下逐瘀湯・加味失笑散・加味四逆散・桃紅四物湯・琥珀散・六合湯・陽和湯など。

2. 針灸：関元・中極・合谷・三陰交などを選穴し，温針あるいは艾灸を行う。月経前あるいは月経期に，1日1回，20分置針し，3日連続で治療を行う。

四 ケースレポート*^{2,3}

患者：49歳，既婚／初潮年齢：12歳／出産年齢：32歳

現病歴：24，25，27歳のときに子宮内膜症と卵巣嚢腫を発症。激しい痛経，血塊を伴う。低用量ピルを25，27歳時に，それぞれ半年間服用。服用直後，血塊はなくなり，痛経も少し軽めになったが，数年後，また同じ状態になった。卵管が細いと診断され，卵管に空気を通す不妊治療を続け，流産2回を経て，3回目の妊娠で出産。産後半年で月経が戻り，経血量は普通，痛経も軽くなり楽になったが，3年後，徐々に悪化。婦人科健診で，再び内膜症と卵巣嚢腫を指摘され，約1年，漢方（オースギ当帰芍薬散料エキスT錠）を1回6錠，1日3回服用。症状は改善されず悪化したため，2012年8月から定期的に婦人科に通院。ここ2年，排卵日は卵巣痛・出血，月経前は全身不調，月経期は痛経・悪心・経血量過多による貧血と，毎月，月経終了まで，月の半分は体調不良。化学治療（1クール6回）で，注射を月に1度打ち月経を止めるようにしたが，3回目の治療時に血圧が190を超え，治療停止。医師より，「MRI検査の結果，リンパ節腫などは見当たらないが，いくつか問題があり，子宮卵巣を全摘したほうが楽になる」との説明を受けた。「しかし，年齢的に，なんとか状態を抑え，オペをしなくてもすむのであれば身体への負担の面からもいい」との話を聞き，中薬治療を始めることになった。

月経状況：28日周期，経期は7日間，経血量過多，経血色は暗深紅色，血塊を伴う。月経期に食事はほとんどとれない（腸との癒着があるため，物を食べると腸が動き子宮を刺激し，まるで出産直後のように子宮が収縮し，あぶら汗をかき，倒れるくらいの激痛）。吐き気もあり，3日間はほぼ寝たきり。排便時も激痛。外出などまったくできず，家庭内でも立ち上がるたびにかなりの出血があり，血塊が出るのも自覚できる。

検査データ：1. 腫瘍マーカー（2013年2月）CA125：441.8，CA19-9：68.2，2. MRI（2013年3月）：①子宮体部筋層の

子宮腺筋症，②子宮体部筋層の筋層内子宮筋腫，③子宮体部下部の漿膜下子宮筋腫，④左卵巣内膜症性嚢胞

他症状：排卵日に，イライラ。ときに排出血，卵巣痛。納可，寐安，習慣性便秘，小便調。舌・脈は不明。

処方方剤：婦痛寧顆粒（天津中医薬大学・第二附属病院製剤）。1回2袋（1袋5g），1日2回，湯に溶かし服用。構成は丹参・三棱（酢製—賦形剤に酢を用い製剤）・莪朮・延胡索（酢製）・鼈甲・海藻・薏苡仁・皂角刺など。

効能：活血化瘀・軟堅散結

処方解釈：丹参—活血化瘀・涼血養血・止痛，三棱・莪朮—破血行気・消積止痛，延胡索—活血・行気・止痛，鼈甲—通血脈・散結消癥・軟堅散結，海藻—消痰軟堅・散結利水，薏苡仁—利水滲湿・健脾除湿，皂角刺—消積破癥・活血散結・理気・除痰・通経・定痛。

経過：患者は，幼少時から錠剤薬しか服用できないため，1回1袋，オブラートに包み，1日2回服用（韓教授処方の1／2量）。3カ月服用後，顕著に体調が良くなり，以前のように，月の半分は体調不良ということがなくなった。月経時の激痛・経血量も改善された。韓教授に経過報告し，QOLを高めるため，月経期服用の止痛薬の処方を受けた。柴胡10g・沈香10g・肉桂6g・乾姜6g・延胡索10g・呉茱萸10g・白芍30g・甘草6g。10剤を散剤に加工（天津・北京同仁堂で代行）し，1回6g，1日2回服用。次回，月経期から服用開始。



月経期の止痛薬（散剤）に加工

体得：血液運行の不暢は子宮腺筋症発病の要因であり，瘀血内停が発病の病理基礎。そして病理過程において，癥瘕形成は重要なポイントである。「気・血・痰」は，本病分析において大きな鍵となる。『靈枢』百病始生のなかに「……凝血滯里而不散，津液渋滲，著而不去，而積皆成矣」という記載があるように，「瘀久夾痰，漸成癥瘕（瘀久しく痰混じれば，次

第に癥瘕となる)」は、本病病機の特徴である。化痰・軟堅・散結法を用いて治療することにより、痰瘀凝結は除去され、癥瘕という有形物は次第に消失する。韓教授は、主症が痛経の場合には、月経前に烏薬・牛膝・路路通など、主症が月経過多の場合は、月経前に蒲黄炭・花蕊石・三七粉などを加減し、治療を行っている。

月経・妊娠・出産・産後・更年期など、女性のホルモンの変動に伴って現れる精神不安やいらだちなどの精神神経症状および身体症状は、「血の道症」と呼ばれていますが、「血の道症」治療は中医学の得意分野です。第3回日本中医学学会学術総会は、「少子化問題を解決する中医学」がテーマですが、中医学により、不妊症・月経異常・精神異常・不定愁訴に悩む人たちの苦しみを少しでも和らげることができるよう、これからも修行を積んでいきたいと思えます。

天津は相変わらずの大気汚染で、汚染度は、このところずっと軽度汚染から重度汚染。気分は、少々ブルーです。そんななか、今年もキャンパスの芍薬が見事な花を咲かせました。また、今の季節は、天津市の市花「月季花（バラ科のコウシンバラ）」がきれいに咲き、私たちの目を楽しませてくれています。月季花は、活血調経・散毒消腫の作用があり、中薬としても使用されています。冬の厳寒に耐え、大気汚染にも負けず、変わらず美しい花を咲かせてくれ、いとおしさを感じます。



芍薬

今回の学会誌が発行される頃は、そろそろ梅雨明けかと思えます。今年の夏は、広い範囲で気温高めとの予報です。皆さま、しっかり水分補給をし、お元気でお過ごしくださいませ。祝 夏安！

(2013年6月17日受理)

文献

- * 1 肖承棕主編：中医婦科臨床研究。人民衛生出版社，289-299，2009
- * 2 張伯礼主編：津沽中医名家學術要略。中国中医薬出版社，487-517，2008
- * 3 余靖主編：韓氷。中国中医薬出版社，188-206，2007



プロフィール

柴山周乃（しばやま・ちかの）

愛知県名古屋市出身

1996年 日本航空株式会社・国際客室乗員部退社

1999年 天津中医学院（現天津中医薬大学）本科入学

2006年 中華人民共和国・中医医師資格取得

2010年7月 天津中医薬大学・中医内科学博士課程卒業

修士課程は天津中医薬大学第二付属病院・循環器内科杜武勲教授に師事、「糖尿病性心疾患の中医病機メカニズム及び臨床治療」を研究。

博士課程は天津中医薬大学・張伯礼学長に師事、「中医および漢方医学による心疾患・脳血管疾患治療」を研究。現在は、引き続き張伯礼学長に師事し外来で診察および中国人学生の講義を担当。